様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４３３００５６

研究課題名（和文）戦後日ソ関係の歴史的検討

研究課題名（英文）Historical Reevaluation of the Post War Japan-Soviet Relations

研究代表者
下斗米　伸夫（SHIMOTOMAI, Nobuo）

法政大学・法学部・教授

研究者番号：８０１１２９８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,500,000円

研究成果の概要（和文）：戦後日ソ関係を再検討する本企画は、冷戦期の日ソ関係、とくに抑留や領土紛争や平和条約をめぐる交渉、１９５５－５６年の鳩山・フルシチョフの共同宣言、デタント期の田中・ブレジネフの交渉、そしてペレストロイカとソ連崩壊期を中心に、二冊の研究書に結実した。
　とくに２０１５年３月に出版した『日ロ関係―歴史と現代』は下斗米の責任編集となった。また９月に東京大学出版会から出版した『日ロ関係史―パラレル・ヒストリーの挑戦』は、日ロ両国の歴史家３７名が１８５５年から現代までの時代を双方のパラレルな視点から解明した。

研究成果の概要（英文）：Our Research project on "Historical Reevaluation of the Post-War Japan-Soviet Relations" has already published two books on the issues of bilateral relations; namely Siberian P.O.Ws, Northern Territorial issues. Special attention was paid on the Hatoyama-Khrushchev negotiation on the Joint Declaration, Tanaka-Brezhnev negotiation, and the Perestroika- Demise of the SSSR period.
Shimotomai edited the "Japan=Russia Relation, History and Present" and was coeditor of the parallel history "History of the Japan-Russia Relations-Challenges of the Parallel History" issues, inviting 37 historians from both countries from 1855 to the present day.

研究分野：国際関係

キーワード：平和条約　冷戦　日ソ関係　北方領土　抑留　スターリン　ソ連　ロシア

１．研究開始当初の背景

戦後日ソ関係を歴史的に再検討する本企画は、戦後冷戦期からポスト冷戦期の日ソ、日ロ関係史の歴史的研究を課題として、２０１２年（平成２４年度）から開始された。この背景として２００８年秋の両国政府が関与した日露フォーラムにおいて日ロ歴史対話の必要が両国の学者から提案されたことは特筆しておきたい。

歴史研究として具体的には冷戦期の日ソ関係、とくに抑留や領土紛争や平和条約をめぐる交渉、１９５５－５６年の鳩山・フルシチョフの共同宣言、デタント期の田中・ブレジネフの交渉、そしてペレストロイカとソ連崩壊期の再検討を課題として、３年計画で本研究企画を開始した。

日本側は、法政大学を中心とした研究チームであるが、この背景に法政大学が下斗米、サルキソフ客員教授などを中心に文化協力を積み重ねてきたことがある。

特にロシアの歴史家との連携による、いわゆるパラレル・ヒストリーの手法をとることが、その研究過程で合意された。このパラレル・ヒストリーとはお互いの歴史間の差異を前提として当該対象に異なった国の歴史家が競作で執筆するものである。主としてロシアがポーランドなど歴史解釈で異なる論争があるときに試みたものであったが、日ロ間でも有効であることが日本側の当該研究チームでも合意され、ロシア側歴史家と本格的に歴史研究で協力する初めての試みとなった。

こういった研究の背景には２０１１年３月１１日の東日本大震災以降の日ロ関係の変化を見直す中から、最新の現代的傾向から見た日ソ関係史の再検討と、これを通した日ロ間の歴史対話の課題を認識したことがある。五百旗頭真氏など日本を代表する外交史家が本研究に間接的に協力していただいたことは特筆したい。

また、法政大学のロシア研究人脈がトルクノフ・ロシアMGＩMO 学長やパノフ大使、特にサルキソフ法政大学客員教授などと共同してきたことが大いに貢献した。

２．研究の目的

本研究の対象である戦後日ソ関係の歴史的再検討に関しては、究極的には日ロ関係の改善といった目的もあったが、あくまでも主眼は両国間の戦後冷戦史、そしてその克服過程を両国の歴史家の対話によって進めるという目的があった。つまり歴史を通じた日ロの民間交流、市民社会同士の対話、である。このような歴史対話の方法とは歴史解釈の差異を前提として、その解釈と対話といったパラレル・ヒストリーを、日ロ関係史に応用することを企図していた。

つまり同一課題に関して日本の研究者とロシアの研究者とが解釈の差異を当然としてあえて論文を執筆し、そのことを通じて歴史対話するという目的がある。もちろん、単にロシア人研究者だけでなく、旧ソ連からもウズベキスタンの歴史家、日系カナダの研究者、在日の中国人歴史研究者の協力も得ることができた。特に日本側でも戸部良一氏など日本外交史家とソ連史研究者との国内におけるコラボレーションにも必要な注意を払ってきた。

３．研究の方法

この間本研究課題“戦後日ソ関係の歴史的再検討”に与えられた基金を利用して、日ロを中心とした国際会議を開催した。最初は２０１１年１２月のモスクワの科学アカデミー東洋学研究所での会議がキックオフとなり、当該研究企画の初年度となった２０１２年１０月に盛岡の岩手県立大学で第一回の公式的な日ロ歴史対話を実施、約３０名の日ロの歴史家が参加、各論文のコンスペクトを発表した。

そして次年度の２０１３年６月にはモスクワ国際関係大学に日本側の主力が参加（下斗米、河原地）した。中でも頂点となった、１０月末の研究会議には淡路島国際研究センターを舞台に、日ロ歴史研究者約４０名による研究討論の交流集会を開催できた。主力となったのは、本研究集団の下斗米、河野、富田、河原地、であったことは強調したい。この他、ロシアからトルクノフMGＩMO学長をはじめ、パノフ大使、キリチェンコ氏などが参加したことも日ロ文化交流におおいに貢献したと自負している。

２０１４年初めには、本来の法政大学を舞台とする研究会が開催され、間接的に協力いただいた五百旗頭真、木村崇（京都大名誉教授）、黒沢文貴（東京女子大）らの参加が当該企画をさらに豊かなものにした。この点では法政大学現代法研究所からも若干の支援を受けた。

結局日ロパラレル・ヒストリーの日ロ同時出版にこぎつけるに際しては日本側２０名、ロシア側１７名の歴史家を招待した企画はほかの研究助成機関（サントリー財団、渋沢財団など）の支援も得ることができた。主力となったのは言うまでもなく本科研費（Ｂ）の援助に多くをおっている。

４．研究成果

当初３年であった研究に関してはさらに一年間、翻訳や調整に時間をとられ、研究期間を延長したが、その結果もあって当該研究期間中に二冊の研究書を刊行することができた。

とくに２０１５年３月に法政大学出版局から出版した『日ロ関係―歴史と現代』は下斗米が責任編集となり、本研究企画の主力の論文を関係メンバーが執筆する研究書を出版できた。

この企画については、抑留論の富田武（第五章　富田武「シベリア抑留の論争問題と論点整理」)、第六章が河野康子氏の「沖縄と北方領土をめぐる米ソ日関係」、そして第七章「日ソ・ロ関係と中国」（研究員趙宏偉）など、法政大学を拠点とした５カ国の現代史研究者による最新・気鋭の研究成果がちりばめられている。

他の執筆陣は、第一章　黒澤文貴（東京女子大教授）「江戸・明治期における日本の対露イメージ」

第二章　木村崇（京都大学名誉教授）「明治期日本知識人の対露イメージ」

第三章　K・サルキソフ「伊藤博文のサンクトペテルブルグ訪問一九〇一年一一―一二月」

第四章　S.M.ムミノフ（オクスフォード大…現代法研委嘱研究員）「冷戦の最初の犠牲者：菅季治の犠牲、赤狩りと日本におけるソ連からの引揚者」

第七章　スベトラナ・ワシリューク　「日ロ経済関係」

といった形で、本研究の主要メンバー(河野、富田、趙)が主力となって編著を出版できた。

また９月に東京大学出版会から出版した『日ロ関係史―パラレル・ヒストリーの挑戦』は、日ロ両国の歴史家３７名が１８５５年から現代までの時代を双方のパラレルな視点から解明した。その本体となっているのは下斗米、富田、河野、河原地、といった中核の研究メンバーであって、

研究分担者は

第一一章、富田　武、政財界の反ソ・親ソ勢力

第一七章、富田　武、シベリア抑留の実態と帰国後の運動、

第一九章、河野康子＆下斗米伸夫、領土をめぐる日米ソ関係（一九五一―七〇年)、

第二三章、下斗米伸夫、ゴルバチョフ登場と「拡大均衡」論（一九八五―九一年）

第二七章、河原地英武、「日ロ関係の過去十余年」

を各自が分担したことで貢献できた。

なおこの著作は、日ロパラレル・ヒストリーという企画に鑑み、ロシア語での同時出版という試みを同時に遂行した。またこのことについてはＮＨＫテレビの番組、「視点論点」において下斗米がその意義について論じることができた。

この結果、ロシア語版が同じ装丁でロシアの最高の国際関係大学であるＭＧＩＭＯからトルクノフ学長、ストレリツォフ教授が中心となって、２０１５年５月にパイロット版が作られたが、１２月には同大学で開催されたロシア日本学研究者大会でプレゼンテーションとなり、下斗米も招かれて参加した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 下斗米伸夫、「敗戦時の日ソ関係」、『近代熊本』38 号、3-24 頁、査読なし、2016/03/31

② 下斗米伸夫、「ウクライナをめぐるロシアの政治エリート（１９９２－２０１４）」『ロシア・東欧学会年報』、43 巻, 21-42 頁、査読あり、2015/03

③ Nobuo SHIMOTOMAI　Bolsheviks,Soviets and Old Believers,“ Japanese Slavic and East European Studies ”、 vol.35,pp 23-43.査読あり、2015/03/31

④ 下斗米伸夫,「二つのキリスト教世界」『アステイオン』、81 巻,144-58 頁、 査読なし、2014/11/19

⑤ 下斗米伸夫、「ロシアの太平洋戦略と安倍外交」、『外交』、24 巻,29-33 頁、査読なし、2014/03/31

⑥ 河野康子、「池田・ケネディ会談再考」、『法学志林』111 巻 2 号、1-30 頁、査読なし、2013/11/28

〔学会発表〕（計１件）

① 下斗米伸夫、「ウクライナ危機とロシア」、防衛学会講演、『防衛学研究』、53 巻, 23-30 頁、 2015/09/30　神奈川県横須賀市走水、防衛大学校講堂

〔図書〕（計５件）

① 下斗米伸夫編『日ロ関係―歴史と現代』法政大学出版局、２０１５年３月刊、212 頁。この著作では、編集者の下斗米が序文を執筆した。212 頁

② 五百旗頭眞、下斗米伸夫、トルクノフ、ストレリツォフ編著『日ロ関係史―パラレル・ヒストリーの挑戦』、東大出版会、２０１５年９月刊。713＋12 頁

③ 富田武『シベリア抑留者たちの戦後・冷戦下の世論と運動Ｉ９４５－１９５６年』人文書院、２０１３年１２月刊。272 頁

④ 下斗米伸夫『ロシアとソ連－歴史に消された者たち、古儀式派が変えた超大国の歴史』河出書房新社、２０１３年、330 頁

⑤ 下斗米伸夫『プーチンはアジアをめざす』ＮＨＫ新書、２０１４年、219 頁

といった著作が、直接間接に当該研究企画と連携して執筆された。

６．研究組織
(1)研究代表者
下斗米　伸夫（SHIMOTOMAI,Nobuo）
法政大学・法学部・教授
研究者番号：８０１１２９８６

(2)研究分担者
河野　康子（KONO,Yasuko）
法政大学・法学部・教授
研究者番号：４０１８６６３０

趙　宏偉（CHOU,Koui）
法政大学・キャリアデザイン学部・教授）
研究者番号：４０２６５７７３

富田　武（TOMITA,Takeshi）
成蹊大学アジア太平洋研究センター・客員研究員、同大学名誉教授
研究者番号：１０２０７６０７

河原地　英武（KAWARAJI,Hidetake）
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：６０２２４８７０

(4)研究協力者
五百旗頭　真
県立熊本大学・理事長

木村　崇
京都大学・名誉教授

黒澤　文貴
東京女子大学・教授

シェロッド・ムミノフ
ケンブリッジ大学・アジア中東研究学部・研究員

コンスタンチン・サルキソフ
山梨学院大・名誉教授